広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	書評　『移動とことば２』　：　多言語的転回と物語的転回の幸せな同居
Author(s)	中山，亜紀子
Citation	広島大学日本語教育研究 ， 33 ： 42 － 45
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53754
URL	https://doi.org/10.15027/53754
Right	Copyright (c) 2023 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	

書評　『移動とことば２』
―多言語的転回と物語的転回の幸せな同居―

中山　亜紀子

Book Review: Idou to Kotoba 2:
A happy mingling with multilingual and narrative turns

Akiko NAKAYAMA

キーワード：多言語的転回，物語的転回，オートエスノグラフィ，ライフストーリー

１．はじめに

今更いうまでもなく，現代はヒト，モノ，情報が驚異的な量とスピードで動いている時代である。疫病，戦争，貧困，自然災害などの問題は，人びとの移動を止められないどころか，一層加速化しているようにも見える。このように「移動」が常態化した世界では，「従来の近代主義パラダイムによって本質主義的な二項論理（binary logic）で定義されていた社会や言語のカテゴリー境界は」否応なく「拡大され，ぼやかされ（Kubota 2016）」る。一方で，「一国の国民は一つの言葉を使うべきだというビリーフは，公の場や政治的な言説に，ある特定の言語学的分野においてもしつこく残り続けて」（Martin-Jones et al. 2012: p. 3）おり，日本においては，日本人とは人種的，文化的，言語的に，単一の人びとを指し，日本とはそのような人びとが暮らす国だという三位一体のイデオロギーをあちらこちらに見ることができる（酒井 2015）。

川上郁雄，三宅和子，岩﨑典子の三人の編者によって編まれた『移動とことば２』（以下，本書：くろしお出版　2022 年３月 20 日　全 255 ページ）は，さまざまなイデオロギーに晒されながら，幼少期や青年期にかけて国内外で移動を経験した人びとが，自らの多／複言語，多／複文化性を自分で，あるいはインタビューに答える形で語った書物である。

母語話者はもはや，言語教育のゴールではなく（真嶋 2021），複言語話者の育成が日本語教育学会でも目標とされているが，多／複言語話者になるとは，どういうことなのか，複言語話者を育成する教師にはどのような資質が求められるのか。日本語教育界の中に定まった答えはないように思える。本書は，多／複言語話者である，または多／複言語話者になるとはどのような体験なのかを考える絶好の材料を提供してくれる。

２．本書の構成

本書は，川上郁雄による序章，三宅和子によるあとがきに加えて，オートエスノグラフィ（２章，３章，５章，７章）共同的（collaborative）エスノグラフィ（１章），ライフストーリー（４章，９章），調査協力者に対して語ったバージョンの異なる研究者のライフストーリー（７章），往復書簡（８章）などさまざまな形式をもった９編の自伝的研究からなっている。2018 年に出版された『移動とことば』の続編であるが，前編とは異なり，研究者自身も空間と時間を移動することを意識した「地動説的研究」が集められている。

序章では，川上が「なぜ「移動とことば」の語りなのか」というタイトルで，移動し，多／複「言語」を使う人びとの「語り」をなぜ聞き，読む必要があるのか説明している。

川上は，現代では，言葉やアイデンティティは「もはや静的かつ固定的なもの」ではなく，「動態性や複合性のあるものとして捉えられる」（p. 1）としたうえで，本書ではポスト実証主義，ポスト構造主義的立場に立って，「現代の「人とことばの社会」のリアリティを把握する新たなアプローチの創造」を目指したと説明する。川上ははっきりとは述べていないが，このような新たなアプローチが目指されるのは，近代が生み出してきた「国や社会の視点」に立った研究からは見えない／見えなくされている／存在しないことになっている人々の存在や体験が多くあるからではないだろうか。だからこそ，「「人とことばの社会」のリ

アリティ」を，当事者の「記憶と経験の語り」」（p.３）として描く必要性があるのだろうと評者は考える。

川上は続けて，ホミ・バーバの「第三の空間（The third place）」概念を挙げる。「社会的，歴史的，文化的な文脈」の中で，移動を経験する人びとは「移動先の生活において，マジョリティとマイノリティ，定住者と移民，中心と周縁といった関係性に直面する経験を積」み，「日常世界の認識を再構築せざるを得なくなる」（p.７）。移動する人びとによる自らのロケーションの模索は，「主体の位置に関する認識」であり，「異種混淆性」「中間領域性」「両価性」「擬態」などの戦略を伴う「自己の主体性についての戦略を磨く領域」だとされる（p.８）。語られた移動の経験を聞き，読む必要性は，人びとの生き方を「探求し，知る」ことにあると川上は述べている。

序章に続いて，１章の Laura Sae Miyake Mark と三宅和子は，父がイギリス育ちのアメリカ人，母（三宅）が日本人の Mark と母である三宅が，子ども時代からのことを協同（collaborative）エスノグラフィという形で語ったものである。イギリス人／日本人という国家に帰属した形のアイデンティティと，身体的特徴，知識，言語能力で引かれる境界を移動するための家族と少女の緊張が伝わってくる。

２章の尾辻恵美はアメリカ，スコットランド，日本，シンガポール，オーストラリアと移動した経験を家族史とともに語ったものである。メトロリンガリズムとリンクする体験は興味深い。私はこの物語を知的エリートである父と娘の物語として読んだ。

３章の半嶺まどかは，ともに琉球諸語が話されている沖縄島と石垣島での幼い頃の生活，アメリカ，東京，イギリス，そして沖縄と移動する間に，「自らの家族のことば（継承言語）」である琉球諸語への見方がどのように変わって行ったのか，そして「自身の父方の祖父母の村である石垣島宮良地区のことば（めーらむに）を学び，ことばの再活性化（language reclamation）の活動と研究を行」（p.73）うようになったのかを，オートエスノグラフィの形で語っている。

４章は，岩﨑典子が，日本留学をしたスロバキア人の，６年にわたる言語ポートレートの変遷を紹介する。長期にわたって調査を継続することができることに敬意を表したい。

５章は，南誠（梁雪江）が，中国帰国者である自分の体験を，両親や祖父母のことを含めて書いている。いろいろな感情があったであろう子ども時代のことを淡々と語る語り口，中国人と日本人の二者択一を迫る日本社会の脅迫めいたカテゴリー化は，コスモポリタンとして生きることを自ら選択した本書所収のいくつかのストーリーと対照をなしている。日本人と中国人を分ける線が「身体的な規律（p.142）」を伴っているという主張は説得力を持つ。

６章はすでにオートエスノグラフィの著書もあるリーペリス・ファビオによって書かれている。国境や言語を移動することと，家族を含めて他者と親密さを維持することについて，考えさせられた。

７章の辻晶は，ドイツ語，日本語，英語，オランダ語，フランス語と数多くのことばを使った経験を，英語でつづっている。

８ 章の川口幸大と津川千賀子は，大学進学を期に仙台に移動した二人の往復書簡だ（詳しくは後述する）。

多／複言語・多／複文化を生きるのは，国境を越えるという体験がなくてもありうることを示しているのは９章の川上による荻野アンナのインタビューである。横浜に育ちながらも，家庭内では関西弁で，父の言葉である英語よりもフランス語を職業の言葉として選んだ荻野の生活史は，人とことばの関係の複雑さがよく現れている。

本書所収の論考の魅力は，実際に読んでいただくのが一番いいだろう。どの論考からも，移動する人びとが「主体の位置」をどのように獲得しようとしたのか，その戦略とそれに伴う感情を読むことができる。以下では，主に３章の半嶺と８章の川口・津川を中心に取り上げ，ある言語の「話者」である／になるとはどういう経験なのか考えてみたい。なお，本書では，多言語／多言語性ではなく，複言語性という言葉が用いられているが，その概念的な違いの詳細を述べることは評者の手に余る。ここでは，Kubota（2016）に倣い，「多／複言語（multi/plural）」という言葉を用いる。

３．国境を越えない多／複言語性

3.1　方言間の移動

筆者が最初に目についたのは，国家の名前を冠した大文字の「言語」ではなく，方言[1]間の移動が取り上げられている点である。８ 章の川口・津川では，関西（大阪）から仙台への移動が，半嶺では同じ琉球諸語の中の沖縄島の「うちなーぐち」と石垣島の「めーらむに」が取り上げられている。方言間や国内の移動は「多／複言語」「多／複文化」を伴う「移動」と考えられるのだろうか。

安田（2020）は，現代でも「「日本語」としてくく

られるなかの地域言語や階層言語など数多くのバリエーション（p.60）」があり，歴史的には，旧日本帝国にはアイヌ民族，朝鮮民族，台湾人，満州人，ロシア人などを含め多言語状況が作られていた（そして，それは敗戦後にも継続している）（安田 2011）ことを指摘する。多言語状況の中には手話話者を含めることもできるだろう。

他方，庄司（2020）は，安田の議論に対して，「日本もアイヌ語など地域的な言語集団を域内に含むれっきとした「多言語状況」を内包する国家ではあった。しかし基本的に日本語とアイヌ語の話者どうしが対等な社会関係で言語的な接触を行う状況ではなかったし，そのような「多言語状況」の存在さえ，多くの日本には経験されず，また認識されなかったと推測される(p.15)」として，安田の歴史的多言語性を否定する。

言語学的には，多くの議論があるのだろうが，何を「標準語」と呼び，何を「方言」と呼ぶのかの間には，近代国家の強い政治的な思惑が働いている（田中 1981）。田中は（1981），「首都の言語エリートは，どこかの方言を耳にして,「これが日本語であろうか。聞いている方が恥かしくなってしまう」などと感じるのである。」（p. 157）と，半世紀近く前の方言に対する標準語の優越を証言している。

本書には，「移動」「ことば」についての厳密な定義はないが，方言間の移動を取り上げることは，近代国家成立以降に推し進められ，多くの人びとに内面化されてきた標準語イデオロギーに対する抵抗が表されていると考えるのは深読みか。川口・津川や半嶺の論考を読めば，国内の移動によっても，アイデンティティと自己の揺らぎを体験することがわかる。

また，本書の趣旨が，近代が生み出してきた「国や社会の視点」からは見えなくさせられている体験を語り／聞くことや，移動を経験する人びとが，どのように「主体の位置」を再構築しているかという点に注目するのであれば，方言と標準語，方言と方言の間での移動を取り上げることは至極まっとうに見える。

国家間の移動を経験できない人にとっても，方言間の移動を語り，自覚化することで，自らのことばを「日本語」としてだけではなく，さまざまに分節化することができ，日本対非日本（我々と彼ら）を作り出す対立軸を緩和する（中山・中井 2022）可能性もある。5章で南は「誰もが言語的弱者／マイノリティの意識を持ち，言語の可変性（生成可能性）に気づいていれば，社会と文化はもっと豊かになり，〇〇人ではなく，目の前に現れる個性を持った他者に初めて出会えるのだろう。（p.144）」と近代国家の枠を超える主体の創出を期待しているが，多くの人が自認する「日本人」という国家と一体化しマジョリティのアイデンティティを分節化する方法を考える必要があるのではないか。

3.2 「〇〇語話者」というアイデンティティのポリティクス

その一方で，本書を読んで，自らのことを「〇〇人」「〇〇語話者」であると考えることは，もう少し複雑な過程が含まれていると考えるようになった。川口と津川の往復書簡の中では，「我々」と「彼ら」の境界を作ることが，いかに重層的であるかが示される。例えば，関西では馴染みの深い飴，言葉遣い，大阪で名門と言われる高校の制服という生活圏に根差した知識。「あれ知ってる？」「知ってる知ってる」という地元トークの中で作られるような「我々」意識。また，東北で出会った人たちに大阪生まれであることを伝えた時の反応。メディアの中で消費されるボケとツッコミに代表される「大阪人性」。他者から「大阪人」というカテゴリーでまなざされ，それを積極的に（あるいは消極的にでも）引き受けざるをえなくなったとき，川口と津川は「大阪出身者」になる。「大阪出身者としての振る舞いは，私たちが2人ともそうであったように，大阪を離れた後から再帰的に築かれるものでしょう（p.205）」。東北では二人とも大阪人（関西人）ではいるが，二人の間の差異も同時に描かれる。父母の出身地，懐かしいと感じるお祭り，夏休みの帰郷など，大阪にいる時の二人は異なっている。

本来は異なるものが他者からのまなざしによって同一性（カテゴリー）を付与され，それをどのような形で引き受けるのかという問題は，自分をどのように名乗るのかという問題とも重なる。Mark・三宅の中で，中学からイギリスの学校に行くことを選んだMarkは，留学生ではなく，イギリス出身の学生と見られるように，英語を必死に勉強するとともに，日本名をやめ英語名で呼ばれることを好んだという。

> Lauraと名のることは，foreign student（外国人留学生）とhome student（本国学生）のアイデンティティ・カテゴリーの間を操作するための道具になった。（p. 31）

また，半嶺にとって，他者からのまなざしは，アメリカではアジア人，日本人として，東京では沖縄人として見られる名前の珍しさと見た目の日本人っぽくな

さという身体性を伴っている。半嶺のストーリーが本書の中でも際立っているのは，移動とそれに伴うアイデンティティの交渉を経て,石垣島のことばである「めーらむに」の話者に自らなった点だ。エジンバラやフィンランドへの移動によって少数言語教育の実践を学ぶ機会を得て，半嶺は，「めーらむに」の話者という主体の位置を自らの行為主体性（agency）をもって引き受けたということができる。これは,「めーらむに」を話し始めた時に，半嶺が「めーらむに」の流暢な話者であったことを意味しない。言語の能力とは関係なく，半嶺は「めーらむに」話者になろうとし，その努力を続けた。

人が自分のことを〇〇語話者だと名乗るということは，言語能力だけではなく，その人の身体性や個人史を含めた非常に政治的な運動になりうるのだということを教えられた。

４．おわりに

研究とは決して真空で行われるものではない。研究者のアイデンティティのゆらぎや他者からのまなざし,あるいはゆらぎやまなざしを経験しないで暮らすことができることのマジョリティ性と隠されたマイノリティ性をリフレクティブ（再帰的）に考えることができるのが，本書で「地動説的研究」と呼ばれる語りを用いた質的研究の魅力である（八木他 2021）。本書によって，移動した当事者が自らの体験を語ることによって見える地平の一層の広がりが実感される。

一方で，日本語教育における質的研究の隆盛によって，研究者や学習者，教師によって書かれたストーリーを読む機会も増えた。今後，ストーリーの質に関する議論（エリス＆ボクナー2006）やこれらの研究を指す用語の定義（土元＆サトウ 2022）なども必要となるだろう。移動を経験した人びとの内的真実を語る（ブルーナー1998），説得力のあるストーリーに期待したい。

注

1) 琉球諸語を方言と呼ぶのかどうかは，非常に政治的な問題であるが,国家という名前を冠していないという一点で，ここでは方言と呼ぶ。

参考文献

エリス，C. ・ボクナー，A. P. （2006）「自己エスノグラフィー・個人語り・再帰性－研究対象としての研究者」（デンジン，N. K. ・リンカン，Y. S.，編・藤原顕，訳）．質的研究ハンドブック 3 巻（pp.129-164）．北大路書房.

川上郁雄，三宅和子，岩﨑典子編著（2018）『移動とことば』　くろしお出版

川上郁雄，三宅和子，岩﨑典子編著（2022）『移動とことば２』　くろしお出版

酒井直樹（2015）『死産される日本語・日本人－「日本」の歴史―地政的配置 』(講談社学術文庫)

庄司博史（2020）「多言語状況をとらえなおす－特に多言語環境概念検証の枠組みから」福永由佳編，庄司博史監修『顕在化する多言語社会日本－多言語状況の的確な把握と理解のために』（pp.10-34）三元社

田中克彦（1981）『ことばと国家』岩波新書

土元哲平・サトウタツヤ（2022）「オートエスノグラフィーの方法論とその類型化」『対人援助学研究』12, 72-89.

中山亜紀子・中井好男（2022）「言語教師の見えない多様性を探る－言語ポートレートを用いた語り合いをもとに」『日本語教育学会秋季大会予稿集』167-172.

ブルーナー, J. S. (1998) 『可能世界の心理』田中一彦訳　みすず書房

真嶋潤子（2021）「日本語教育における CEFR と CEFR-CV の受容について」西山教行，大木充編『CEFR の理念と現実　現実編　教育現場へのインパクト』（pp.67-84）くろしお出版

八木真奈美，中山亜紀子，中井好男（2021）『質的言語教育研究を考えよう-リフレクシブに他者と自己を理解するために』ひつじ書房

安田敏朗（2020）「「多言語社会」の語り方」福永由佳編，庄司博史監修『顕在化する多言語社会日本－多言語状況の的確な把握と理解のために』(pp58-80) 三元社

Kubota, R. (2016). The Multi/Plural Turn, Postcolonial Theory, and Neoliberal Multiculturalism: Complicities and Implications for Applied Linguistics. *Applied Linguistics:* 37/4: 474–494. doi:10.1093/applin/amu045.

Martin-Jones, M., Blackledge, A. and Creese, A. (2012). Introduction. in M. Martin-Jones, A. Blackledge and A. Creese (eds.) The Routledge Handbook of Multilingualism. New York: Routledge, pp.1-25.